

地域密着

「また日野さんですか」と言われ続けた40年

日野 頌三 著 頌徳会グループ
2019年1月発行



本書は、大阪府堺市の社会医療法人頌徳会理事長で、(一社)日本医療法人協会名誉会長の日野頌三氏による自伝の書(非売品)。病院経営者、企業経営者を問わず、功成り名を遂げた経営者の自伝というものは、概ねつまらない。その多くは、主観的な成功談や自慢話、綺麗事で終始し、ホンネが語られていないからだ。しかし、この本はそれら凡百の自伝本とは全く内容を異にしている。

本書を貫徹する縦軸は1941年、徳島に生まれた著者が大阪大学医学部助手を経て、1979年に立ち上げた日野病院(前身の日野診療所)の40年間にわたる「経営史」である。と同時に横軸として、その間の激動する老人医療制度改革・介護保険導入等の一連の制度改革の流れを俯瞰し、病院経営のトップリーダーが制度改革の荒波の中で、悪戦苦闘してきた記録が編み込まれている。確かに、わが国の医療費抑制策が始まったのは1983年頃であり、頌徳会グループの成長の歴史と正に重なっているのだ。

加えて、2009年に日本医療法人協会会長に就任、2015年に退くまで、国の様々な制度改革の議論に参加してきた中で興味深い裏話なども明かされる。同協会会長・在任中での民主党政権誕生、自民党への再度の政権交代、さらに東日本大震災等を体験した著者は、「政治動向に翻弄されたり、予期せぬ出来事が次々と起こり、最初に目指した計画どおりに進まないことも多々ありました」と述懐する。その点では、中小民間病院経営者の単純な自伝本としては捉え

られない、複眼的な視点、重層的な構造を持つ労作ともいえる。

日野病院に関する具体的なエピソードとしては、1997年に、同院で亡くなった患者家族の声を全国紙が事実確認もせずに取り上げ急遽記者会見まで開くことになった、いわゆる報道被害の体験の顛末、2000年に多額の借り入れにより透析専門の日野クリニックを開設したものの、開院間際に予期せぬ事態が起こり、創業以来最大のピンチに見舞われたことなど、過去の辛い経験についても率直に記されている。著者は持ち前のポジティブ思考とバイタリティで、これらの苦境を乗り切っていった。私たち医業経営コンサルタントには、単なる成功談よりも、「失敗し、それをいかに克服したか?」という部分にこそ、学ぶべきことが多いように感じられる。

自らを「最後の創業・病院経営者の世代」と称する著者は、その経験から最後に、「ドクターの理事長によるワンマン経営が常態化すると、病院組織は安定しない。私を補佐する医師、常務理事、看護部長、事務長などの核となるスタッフと出会えたからこそ、医療・福祉経営の安定が実現できたと断言できる」と総括している。

ところで、本書を読んで知り得たのだが、著者は日本慢性期医療協会会長の武久洋三氏とは、徳島の中学校で同級生だったという。坊主頭の中学生のお二人が、教室で机を並べていた姿を想像すると、何となく微笑ましく思えてしまう。

(当協会京都支部監事 美留町 利朗)